

# 建築系における枠超え思考に向けて

240314to

## 1. はじめに

建築づくり・街づくりにおいて、社会に対しては、脱成長、人間中心、理念理想、といった論調が多々声として上がっているものの、なかなか先に進まないのが現状である。すなわち、事態の重要性が理解されてはいるものの、あと一步が踏み出せない、といった現状がある。

ではどうする。現行の改善として技術のイノベや技術倫理の履行などが真っ先に考えられるが、これらは今の社会システムの枠内にとどまっているかのようにも見えることから、むしろこうした枠組みを超えて哲学思考が魅力的にも見える。そうすると、技術や社会システムを越えて哲学に期待することになり、支持の声も確かに多いものの哲学の何にどう期待するかという段になれば、トーンが低下するのも現状である。それゆえに、こうした現状を如何に乗り越えて次への一步を踏み出すのが今まさに待ち望まれているといえる。

ここでは、そのために必要なことを理屈化した。対象は生活の営みからの延長を中心とした建築・街づくりである。論の遂行に際しては、過度の効率化の見直し、理想理念による方向付け、生活次元からの哲学、数値・数量化背後の見直し、に着目して、枠超えを必要とする現状を把握し、枠超えの理屈を整理し、建築系における諸事象を考察することにする。なお建築系には市民生活、建築・街・都市を総称とした。

これをもって、現状を越えるいわば枠超えのアプローチに向けた基礎研究とし、新たなパラダイムの実現に向けた一步にしたい。

## 2. 枠超えに込める

枠超えとはいうなれば理想社会というつもりである。建築や街づくりにおいて、理想の設定が一足飛びにはできないことより、設定中という進行形の行為を枠超えとしてみたいものである。さすれば、個々問題に対して理想の現実化を図るとするならば、個々毎に種々の理想的な様相が描くことができ、それを束ねた大きな意味での理想が進行形の形態となる。

しかしながら、理想論を語る上でも、社会の運用に際しては、社会を推進する側と市民側との対峙からえてして市民層には不利益を被る場合も出てくる。この点の克服としては、社会的にすべての階層が理想をそれぞれに設定し運用することが困難であり、ましてや市民層の価値観先行は望むべくもない。このため取られている社会的な理解は対峙構造をそのままにして、社会の多様性をもって対峙構造を和らげることである。ただし、その時点での多様性には現行の枠組みを越える側面を持っているとしてよい。

## 3. 成長路線のもとでは

枠超えにおいて、今の時代を席卷する成長路線に言及したい。成長路線を運営する推進側でも程度の差こそあれ、枠超えではなくイノベが世の中に定着し、市場繁栄の社会におい

て、市民層はその恩恵を受けていると考えている。いわばワイングラスツリにあるような形で社会が充実していくという理屈が根底にある。要は、世の中金が回ることによって市民層の活力が維持されるとして、推進側と市民の一体化(例えば生産者と消費者の相互信頼とか)がもちだされるのである。

確かに、推進側の先行、市民側の後行というシステムにおいては、生産・消費や企画運営・利用享受等の行為が社会運営そのものとなっており、成長路線促進が世の中を華々しくさせている。しかし、先行側と後行側との間には相互に作用しあうことが不十分であり、種々の問題が発生しているのも事実である。格差問題の一面もその類いといえる。

では、相互に作用しあうとは、そもそも推進側と市民の一体的な関係性をいうならば、後行に比して先行主導があまりにも支配的であることに何らかの対応が必要と考える。加えて、市民層が社会に二次的参加の様相となる雰囲気はぬぐいきれない。こうなると、そこには市民が主人公などとはいえないような縁遠さがあることになり、しかもそれがあたり前になってしまうことが新たな問題といえる。

## 4. 哲学には

(1) 枠超え； 世にいう「哲学に求める」の背景と意味を検討する。まず背景としては、今の社会システムの枠組みの中では技術によるイノベがあっても根本的な改革になりにくいために、枠超えに期待を込めて要求や願望・希望が沸き上がってくる。

そうして期待が高まる枠超えには、超えるものは人間と(人間主導の)システムという捉え方になるが、それは何かといえれば哲学といえよう。実際には、工学における有識者や専門家の間では、哲学とせず倫理としたいようである。

(2) 哲学と倫理； 建築学会でも種々分野における研究委員会の中には、倫理委員会があっても哲学委員会はない。特別研究委員会にも哲学系の設置希望が最近あったが実現せずであった。両者の差は何か。倫理は建築の土台に基づいて組み立てることを前提としているのであろうが、哲学は全く工学を離れてしまう様相を持っているからかと思える。

(3) 哲学の根本命題； 「人間とは何か」について古代から継続している最大命題について、これを対象の不確定性として位置づけることにより、確定性社会における各種の問題に対し取り組みが加速している。もちろん、根源問題を抜きにしては語れずを旗印にして頑張る方々も少なからずいるという。

(4) 哲学の現実対応細分化； 哲学界においては、哲学の何たるか、人間とは、社会とはを根源的に論ずることが基本命題だが、今の時代には、論議対象を人間、技術、社会、等と区分して、現実の科学体形に合わせるようになってきて、建築哲学、技術哲学、等と細分化されている。あわせて人間を扱う対象を倫理としての枠組みが定着している中では、従来

の哲学は機能を失って「哲学は死んだ」といわれるほどである。しかし、この動きは妥当なのであるのか。我々が期待する哲学とは相いれないように思える。

(5) 求められる哲学： 我々の哲学は如何にあるべきか。物理学でいえば、物体→分子・原子→素粒子→クォーク云々というように最小基本のものを探し出しているが、哲学もまた人間は如何にと問うのも同じかもしれない。しかし、今日社会が浮草の状態を前提にし、そこからミクロに向かおうがマクロに向かおうが、浮草に共通の基礎を背負わせることには異論はないといえよう。そうすると、浮草の位置づけが今の社会そのものではなく、新たな理想の社会に設定しなおすという行為が、哲学の論拠になるといえる。こうして枠超えが築かれ、それ根源が作り上げられるといえる。

(6) 翻って工学界における哲学； 工学体系を足元に哲学まで論究する研究者も少ないながらも健在である。彼らは「工学が人間とのかかわりの体系であることを重く見て、工学は社会学といった捉え方をする」ので、社会学の背後に哲学有として、哲学を何とか工学体系に引き込みたいといった願望をお持ちである。

では、枠超えを希望の多くの方々の考えはどう考えるのであろうか。それはいわゆる哲学体系の哲学ではなく、むしろ哲学を「生活からの思考」というイメージを持たせたい。だからこそ、こうした考えに応える哲学とは何か、として市民向けを考えざるをえない。

(7) 工学と哲学； 枠超えの主張には哲学待望論があるが、哲学だけにすべてを託すわけではなく、枠超えの旗印のもと、フィードバックとして工学に立ち返るということを忘れてはならない。あくまでも工学の世界なら、技術は今の状況において最善を尽くすという最大使命を大切にすることも、その先も考えることも責務としたいものである。

## 5. 理念理想の土壌

枠超えには何らかしらの方向性もあろう。その一つに理念理想を掲げたい。

理念理想については、著者も以前から挑戦している。関心事は、理念理想とは何か、どうやってつくるのか、である。この節では、理念はどのようなことに基礎置くか考えてみる。

理念理想論議には2形態があろう。第一が、最初に理念理想を過去の遺産や議論を受け継いで、アприオリに構成する形態である。第二は、各種の問題において理念理想を念頭に置いて小出しのアイデアを含めた討論により、自然ともまれていく形態である。著者は、こうした議論が多くの方々もとでなされることで、社会全体へのボトムアップにつながると考えている。

## 6. 効率化の再考

成長路線に疑義を唱える方々は多いが、実際は声だけの段階に留まざるを得ないことは先に述べたとおりである。もちろん、いきなりの理念追求の発言も必要であるが、今少しトーンを下げたレベルも必要と考えて、成長路線を構成する効

率化と管理について着目した。

特に効率化において(過度の効率重視に対し)、人間的な対応ができないかと考える。効率化とは諸元層の構成について、一つの目標に向かって余分なことを削除や切り落としを図ることである。工学における問題対処についてのモデル化に際し、そのようなことが多々行われており、その都度、何らかの対処が必要と叫ばれている。このような話は、一般的には多くの賛同を得やすい。なぜならば、モデル化に際してのスリム化の過程を皆さんが目当たりしにしているからである。ここに、もし思考に余裕があれば、種々諸事項を取り上げることも可能であり、スマート化という行き過ぎる効率化に異を唱えることもできよう。

## 7. 数値・数量化背後を見直し

世の中は数量化世界である。数量・数値は、種々管理に、現象解明に、物事理解に、他、枚挙にいとまがない。数値・数量のメリットは莫大であり、生活充実を図ってくれる。しかしながら問題がないわけではなく、数値・数量の便利さや絶対さにより、何のための誰のためのといった視点が割合狭く意図的であることを指摘したい。この点からも枠超えをしたいので、この節では2点のみ扱う。

(1) 見える化； 見える化があれば結果として出てくる諸現象の論考結果の解釈について、どう対応するのかも大事なことである。これまでは、諸現象は数値化され、数量の大小で物事の満足度や効果度が推し量られる。

しかしながら、例えば人間行動を対象とした数量・数値化においては、モデル化そのものと人間行動の数値によるきめつけ評価が問題であり、ときには人間の感性・感情の本質が数値によりないがしろにされがちなることもある。

数値結果とは設定されたモデルのものであり、モデル設定時の恣意性が結果に反映されてしまうこともあり、人間側は何よりも数値先行で何も考えなくてもいいようになり、結果として数値万能、効率化万能にならされてしまう。およそ人間性はどこ吹く風となりがちである。

(2) 教育； 点数至上の考えは、教える側も学ぶ側も極めて対応しやすいし、行動プランの点数化によって規定できるとあって大変便利である。この便利さが問題となっていることは今更いうまでもないが、一つの見方や一つの評価が絶対視され、これが効率化としてもはやされている。これにどう対処するかが今叫ばれている。

最近、夢見る学校と称した教育現場では、教育を点数に直結させる方向ではなく、個人の人間性育成に向けてことが実践されている。この教育改革の動きが全国に拡散し、これに子どもの成長を願う方々の熱い支持が集まり、教育の根源改革の勢いが静かに蓄えられている。点数第一主義の壁は厚いが、努力は少しずつ形になりかけているという。

## 8. 建築では

住宅を例として扱う。最近、SDGsの観点から、環境工学的な対処が省エネやエネルギー効率向上を目指して、これまでの高気密高断熱に加えて電力問題には太陽光パネルや車の

バッテリーとの連動している。しかしながら、これらは人工エネルギー消費を前提としており、人工エネルギーもいいが、自然対応の住まい方として、過去の伝統技術にもっと対応や追求すべきではと思う次第である。事が起きれば事に対応、技術で対応、エネルギーで対応、といった姿勢がかくも強いとは恐れ入る。便利さも多少の不便あつての二律思考(便利と不便)が人間性を喚起するように思えるし、大きな意味で技術(近代技術)対応もまた二律対応としての道を探ることが求められていよう。さすれば技術万能といった方向も変わってこよう。

なお、街づくりにおいても、技術よりも住民のコミュニティ力が肝要であるので、二律対応は影を潜めている。

## 9. 来るべき危機の時代に際しても

### (1) 人新世において

1960年代以降の人新世時代において、人間行動そのものをどう検証するかをも飛び越して、新たな時代における新たな対応をどうすべきか、といった危機的時代の問題が世に問われている。その根本には、人間の行動が地球環境をも変えてしまう巨大な力を持っているので、これにブレーキをかけて、地球環境を保護していこうという狙いがある。学会では、脱炭素やSDGsの取り組みも精力的ではあるが、どういう訳か新時代のあるべき理念理想を語る哲学が霞んで見える。破局的時代だからこそ哲学の真価が問われる。

(2) 人新世時代に入って一番の危機は、地球温暖化である。人新世の研究者にとっては人類絶滅のカウントダウンが始まっており、種々の学会がこれに真摯に向き合うべきとの声が大きくなり始めている。このような危機到来期においては、どう対応が必要なのか。技術的対応はもちろんのこと、後押しする哲学からの支援が際立ってはいないことが気にかかる。大災害で物理的対応が大きく変わろうとしているならば、それこそ強力な姿勢で哲学論的な主張が必要といえる。

しかしながら、危機を見越して現実にはもう技術対応を考えているという。例えば、オランダでは大規模浮島構想も取りざたされている。このほか、資源やエネルギーの観点からも直結する生活が大変な困難を伴うだけに、抜本的な対応を求めたい。

(3) 人新世時代も対処もさることながら、併せて今の時代、特に人口減少問題をも扱わねばならない。これには、社会生活水準を下げずに生活を謳歌しようということで、あいもかわらずエネルギー使用をそのままにして、生活水準をより以上に高めようとの声も聞こえてくる。

研究者からは、人口減社会なら、モノづくりのトーンを落とし、作りすぎや再開発はやめにしようということが大きな力にはなりえていない。ここに成長路線の厚い壁を感じる次第である。

## 10. 哲学の津々浦々広がり

哲学について、社会的なレベルとは違って個人レベルでの哲学運用をこの節で扱う。

(1) 建築の専門家； 建築専門家の中でも哲学愛好家は多い。

建築は哲学と相通じるし、新たな理論やデザイン構築の拠り所として哲学(理屈付けそのものが哲学)があるということである。ここで、建築の職種ごとに考えてみる。

・設計系や計画系では、自分の理念やデザインソースを哲学と称して概念化や新たな創作として思考の体系に哲学があるとしている。

・構造系や環境系では、対象は人間系であってもアプローチは科学的であり、哲学は入り込む余地なしもところを、哲学愛好家各位は、「仕事遂行は人間である以上、哲学は不可欠」とか、「科学的アプローチ結果の吟味についても視野拡大としても人間判断があれば、その根底に哲学あり」とか、主張され、研究・教育・実務に如何なく発揮されているという。

(2) 平場の哲学論争； 市民であれ専門家であれ、哲学ファンが多く、各地に散在する論議の場として哲学カフェが大いに賑わっている。

これを平場の哲学論の場として、自分の専門を越えた次元で参加する専門家や、主婦などの市民とで、いみじくも市民・専門家の構成で、オールラウンドに論題を決めて論議し、図らずも専門的事象にも市民の声を聞くことができる。また市民への専門家からの考え方が伝わって、相互作用の下、面白い見方や結果が生み出されている。

そこには、古典的な哲学論争あり、人新世の論議あり。一番の関心は、哲学でもって世の中を変えられるのかである。一部の平場とはいえ、関心ある方々の熱い論議が全国に少ないながらもあるという事実は重く受け止めたい。

## 11. おわりに

現状を越(超)えるいわば枠超えに向けたための基礎研究として、建築と街は如何にあるべきかを念頭に、枠超えの背後や構成について議論をした。これはあくまでも先行議論であることを断っておく。以下に議論をまとめて整理する。

(1) 枠超えを構成する四本柱；過度の効率化の見直し、理想理念による方向付け、生活次元からの哲学、数値・数量化背後を見直し、である。

(2) 今を変えるためには哲学が必要とすることを受けて今の枠組みを超えるロジックを哲学と位置づけ。社会の意識には市民感覚を基本とした。

(3) 脱成長とか利潤追求を一義的にせずとした理屈の根幹に効率化と数量化の問題がありとして、問題解決に際し日常生活からも市民感覚で取り組めるものとした。

(4) 哲学は枠超えで自由奔放に考える気楽な系と考え、多くの声が発せられることを目指すとした。

(5) 生活の延長、地域の街づくりの延長が都市づくりとして、個々の論が息づくコモンの改変を中心にした枠組み整備するとした。

(6) 本稿でいう一連の行為がパラダイムに繋がるとした。